

# 中尾浩子さん

Hiroko Nakao

## 弁城川のホタルに魅せられて

「まるで水に浮かんでいる宝石のようでした。真っ暗な闇に浮かぶ無数のレモン色の光。あまりにもきれいで、時がたつのも忘れ、じっと見入っていましたね。」

千葉県から引越してきた初めての夏、小学校1年生の中尾浩子さんが目にした光景は、今でもまぶたの裏に焼き付いている。自然の魅力にすい込まれるようなその時の感覚は、感動を超えた強烈な印象として深く心に刻まれた。浩子さんの家は、門から道を隔てて弁城川が流れをたえる静かな場所。野花在咲き、緑が息吹き、初夏にホタルが乱舞する。雨や雪によって姿と流れを交える自然が目の前にあった。

「川はわたしの庭みたいなものです」と笑う浩子さん。幼いころの遊び場は、もつぱら、清い流れの弁城川。小学校決は地域活動から」というテーマの

低学年の時には水遊びでおぼれかけた経験もあるが、川が怖いと思ったことはない。そんな浩子さんにとって愛すべき川だが、豪雨などの気象変動や周囲の環境変化からか、ホタルが少なくなってきた。そこで「ホタルをただ見ているだけでは」と、母・明子さんが「ぼたるの会」を立ち上げ、浩子さんは5歳下の妹・恵子さんとホタルを飼育し、放流を重ねながら生態を観察した。

## 価値観変えた世界子ども水フォーラム

ホタルの観察活動を始め3年目の平成15年3月、15歳の浩子さんは京都・滋賀・大阪で開催された「第1回世界子ども水フォーラム」に参加した。当時、浩子さんの持っていた水の意識、水問題は、ホタルが生息できるような「自然保護」という観点が強かった。しかし、30か国、112人の参加者から48のプレゼンテーションが行われた。日本からは「もつたいない」「自然環境保護」「水害対策」そして浩子さんたちのグループが担当した「学生主体のネットワークづくり」の4テーマを発表した。



↑メキシコのオリンピックセンターで開かれた開会式で前開催国のあいさつをする中尾浩子さん。剣道着に身を包み、スペイン語でスピーチ。(河川環境管理財団撮影)

し、このフォーラムは、近い将来に地球上で予想される深刻な水不足に向けて世界規模のもので、各国の閣僚をはじめとする国際会議の主要分科会のひとつとして開催されたものであった。ここで気軽な気持ちで参加した浩子さんは、大きな衝撃を受けることになる。「同じ年代の子が『飲めば死ぬ』と分かっていてもその水を飲まざるをえ

## 胸に突き刺さったケニアの子のスピーチ

最終日、各国のパフォーマンズが披露された後、浩子さんが仲良くなったケニアの女の子が英語でスピーチした。「どうしたらいいの教えて、わたしたちが安全な水を手に入れる方法。苦しまなくて済む方法。わたしたちはもう、どうしたらいいかわからない。」前回は英語の壁が高かったが、今回は通訳を介さずに女の子の肉声を理解



↑浩子さんの心を打ったケニアの子のスピーチ。今でも訴える声が頭から離れない特別なワンシーンだった。(同財団撮影)

「わたしにできることって、何だろう。フォーラムの後、そのことがいつも頭の中にあつた浩子さん。たまたま訪れた直方市にある遠賀川水辺館で、河川生物を研究していた坂本貴啓さん(当時鞍手高校・現在筑波大学)と知り合い「環境を守るためには、まず現状を知ってもらうこと、関心を持ってもらうことが大切」と意気投合。坂本さんと遠賀川水辺館を拠点に平成16年11月、中高生自然科学サークル「YNHC(青少年博物学会)」を立ち上げた。地域活動やインターネットによる情報発信を通じて、今では北海道から熊本まで全国50人の会員にまで輪が広がっている。

そして今年、浩子さんは、3月16日から22日までメキシコのメキシコシテ

## 中高生のネットワーク「YNHC」を立ち上げ

「ただここがわたしの原点。ホタルに出会って以来なかつたら、今のわたしはありません。この川はいつかわたしが絶対に帰ってくる場所です。」ホタル舞う弁城川のせせらぎが心地よい夜、浩子さんは、はにかみながらもしつかりとした口調で力を込めた。

ホタルと弁城川がわたしの原点。  
世界を循環する水に国境はなく、  
すべては水でつながっています。



profile なかお・ひろこさん(県立嘉穂高校3年・弁城)

▶小学校1年生の夏に弁城川のホタルと出会い、保護のため生態観察を始める。ホタルの飼育・放流を続けながら研究し、ホタルサミットなどでも発表した。初回から連続して世界子ども水フォーラムに日本代表で参加。16歳の時「YNHC」を坂本貴啓君と立ち上げる。ホタルの師匠は福岡県ホタルの会長長の武内育雄氏(直方市)。高校では合唱部に所属。平成元年1月20日生まれ、18歳、弁城迫在住。